Title	初期シカゴ学派社会学とブルーマーのシンボリック相互作用論
Author(s)	桑原, 司
Citation	Discussion papers in economics and sociology
Issue Date	2002-09-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/8437
Rights	

ISSN 1347-085X



Discussion Papers In Economics and Sociology

No.0203

初期シカゴ学派社会学とブルーマーのシンボリック相互作用論

桑原　司

2002.09.03

THE ECONOMIC SOCIETY

OF

KAGOSHIMA UNIVERSITY

No.0203

初期シカゴ学派社会学とブルーマーのシンボリック相互作用論

桑原　司

2002.09.03

The Economic Society of Kagoshima University
Korimoto 1-21-30, Kagoshima, 890-0062
JAPAN

初期シカゴ学派社会学とブルーマーのシンボリック相互作用論 0)

鹿児島大学法文学部　　桑原　司

Abstract

The Chicago School of Symbolic Interactionism (one trend of the "Chicago Renaissance") represented by the works of Herbert Blumer, has been seen to be major alternative to functionalism and social system theory in American Sociology. In addition, this approach also has been important in sociology as a critique of positivism. Furthermore, according to T. Shibutani, "it is too early for a final assessment of Blumer's work. That will have to wait until the twenty-first century, when future historians will be able to see what remains of current Sociology. It seems likely that many of his view will prevail." So far, We have done many reviewing about Blumer's Symbolic Interactionism. The results which could be gotten as the result are summarized in the following paper [Tsukasa Kuwabara, 2001,"Introduction to a sociological perspective of Symbolic Interactionism (3) (The Summary of a doctoral dissertation, Tohoku University) ," KEIZAIGAKU-RONSHU~ OF KAGOSHIMA UNIVERSITY (ISSN=0389-0104) :No.54, The Economic Society of Kagoshima University, pp.69-86]. In this article, we are trying to clarify the aspects which compose the reason why Blumer's Symbolic Interactionism is generally categorized as one trend of the "Chicago Renaissance".

ハーバート・ジョージ・ブルーマー(Blumer, Herbert George)。１９００年にミズーリ州セントルイスに生まれる。１９２２年に、ミズーリ大学にて、心理学的社会学の大家チャールズ・エルウッド(Elwood, Charles)の指導のもと、修士号を取得し、その後、１９２８年に、シカゴ大学において、エルスワース・フェアリス(Faris, Ellsworth)の指導のもと、博士論文『社会心理学の方法』(Method in Social Psychology)を執筆し、博士号（社会学）を取得する。それ以来、１９８７年に没するまで、シカゴ大学教授、カリフォルニア大学教授、アメリカ社会学会会長などを歴任し、社会学（及び社会心理学）において数多くの業績を残している 1)。彼の社会学に対する貢献は多岐にわたるが、彼を社会学界において一躍その中心人物たらしめた功績として、「シンボリック相互作用論」(Symbolic Interactionism)の定式化が挙げられる。「シカゴ学派社会学」(Chicago School of Sociology)との関連で言えば、ブルーマーのシンボリック相互作用論は、「シカゴ学派第３－４世代」2)、「シカゴ・ルネサンス」3)、「シカゴ学派の知的遺産の再発見」4)、「第２次シカゴ学派」5)などのラベルのもとにカテゴライズされている。いずれのラベルも、ブルーマーのシンボリック相互作用論が、そのパースペクティブの構成に際して、（初期）シカゴ学派社会学の知見を多分に継承していることを示唆している。では、ブルーマーのシンボリック相互作用論は如何なる意味で“初期シカゴ学派社会学”を継承しているのであろうか。

「社会過程」(social process)の重視

初期シカゴ学派社会学が有する社会認識の知的源泉を探ろうとするとき、誰しもまず第一に、A・W・スモールによって紹介され、その後、R・E・パークによって積極的に導入された、G・ジンメルの社会学にたどり着く。個人や社会を絶対的な統一体として認識するのではなく、それらを、諸要素間の絶え間ない相互作用の過程として見るジンメルの考え方が、初期シカゴ学派社会学では「社会過程」(social process) の重視として継承されていった。“社会過程の重視”というこの視点は、ブルーマーのシンボリック相互作用論にも 6)、またその同世代であるＥ・Ｃ・ヒューズのシンボリック相互作用論にも忠実

に踏まえられ、その後双方の弟子筋にあたるH・S・ベッカーにも継承されている 7)。

ブルーマーにおいて、人間の社会とは、まず何よりも「シンボリックな相互作用としての社会」8)として概念化されるものであった。

人間は自らを取り巻く社会的・物的環境に「適応」(adjust, fit)するに先だって「状況の定義」(defining one's situation; definition of the situation)を行う 9)。W・I・トーマスと同様、この点はブルーマーにおいても踏まえられている 10)。人間の「状況の定義」によってある一定の「意味」(meaning)が付与された社会的・物的環境は「世界」(world)と呼ばれ、その構成要素は、大別して「物的対象」(physical object)「社会的対象」(social object)「抽象的対象」(abstract object)の三つに別けられるが 11)、その中の一つ「社会的対象」に「他者」という存在が含まれる。人間の適応活動がそうした他者に対して向けられるとき、それは“相互適応”という形を取ることになる。ブルーマーの描く「シンボリックな相互作用」とは、この“相互適応”の過程のことと捉えてまず間違いない。

人間が営むシンボリックな相互作用のうち、そこにおいて「有意味シンボル」(significant symbol)が用いられているものを指して、ブルーマーは「ジョイント・アクション」(joint action)と呼んでいる 12)。「有意味シンボル」、「ジョイント・アクション」という概念はともに、G・H・ミードより得た着想であることをブルーマーは認めている 13)。ジョイント・アクションとは、別称「トランスアクション」(transaction)とも呼ばれ、それを指してブルーマーは、「人間の相互作用の本来的形態」と呼んでいるが 14)、ブルーマーが「シンボリックな相互作用としての社会」というとき、そこで言う「シンボリックな相互作用」とはこのトランスアクションのことを意味している。

ブルーマーはこのトランスアクションを、行為者たちによる「状況の定義」及び「再定義」(redefinition)を通じて、構成・再構成されるものと捉えている 15)。そこにおいて「状況の定義」は「他者の考慮」(taking another person into account)及び「考慮の考慮」(taking into account of taking into account)16)という形を取ることになる。すなわち、自分と相互作用を行っている他者たちは“いかなる観点を有した存在なのか”、またそうした他者たちから見て自分は“いかなる観点を有した存在と捉えられているのか”、そうした事柄を、行為者たちのおのおのが「定義」「再定義」という営みによって、「構築」(carve out)17)、再構築する中で、トランスアクションは絶えずその形態を変容させて行く 18)。

「自己」(self)への着目

上記の「状況の定義」は、人間が持つ「自己相互作用」(self-interaction)を行う能力によってのみ可能となる。自己相互作用とは、人間が行う「自分自身との相互作用」(interaction with oneself)の過程を意味する概念で 19)、ミードの「『主我』と『客我』との相互作用」(interplay between the "I" and "Me")をヒントにブルーマーが定式化したものである 20)。この過程をブルーマーは、「文字通り、個人が自分自身と相互作用を行っている過程」21)であるとか、「個人が自分自身に対して話しかけ、そしてそれに対して反応する、というコミュニケーションの一形態」22)であると表現している。

「自己」(self)とは、人間がそうした自己相互作用を行うための手段となるものである。換言するならば、人間は自己を有することによってのみ、自己相互作用を行うことができるようになる 23)。かつて、C・H・クーリーやミードが、デカルト的物心二元論に異議を唱え、こうした自己の社会性を強調したことはよく知られている 24)。周知のようにクーリーは、「鏡に映った自我」(looking-glass-self)という概念のもとに、自己が他者を鏡としつつ作られることを明らかにし、ミードは「プレイ」(play)段階と「ゲーム」(game)段階という概念のもとに、自己が他者たちの「役割取得」(role taking)を通じて作られることを明らかにした。この二人の強調する「自己の社会性」という視点はブルーマーにおい

ても強調されている。社会的相互作用(social interaction)は、一方でトランスアクションを生み出し、他方で人間の自己を形成する。人間の自己は、社会的相互作用において、他者たちが、その人との関わりにおいて、その人間に働きかける、その働きかけ方から生じる。これが、「シンボリック相互作用論の３つの基本的前提」のうちその第２の前提「事柄の意味は、その人間が、自分が出くわした事柄に対処する際に用いる解釈の過程(interpretative process)〔＝自己相互作用〕を通じて、操作されたり修正されたりする」からブルーマーが導き出した自己形成論であった 25)。

「自然的探求」(naturalistic investigation)

プラグマティズム哲学においては、科学とは「人間の知識がそうあるべき雛形と捉えられ、同時に、人間の知識を発展するものとして、その結果として、人間同士の相互適応および人間の環境に対する適応を漸進的に促進するものと」捉えられていた 26)。こうした科学観は初期シカゴ学派社会学に強い影響を与え、その影響はブルーマーの科学観にも色濃く現れている。この点についてハマーズレイは次のように述べている。「シカゴ学派社会学、さらに、ハーバート・ブルーマーの方法論的な諸見解に対して、最も重要な影響を与えた哲学思想はプラグマティズムであった。ブルーマーやそのほかのシカゴ学徒が、人間の社会生活の特性に関する自らの諸見解の多くや、同時に方法論的な見解のいくつかを引き出したのは、まさにこのプラグマティズムからであった」27)。

科学というものを“行為者たちが日常的に行っていることを洗練させたもの”28)と捉え、その効用を人間による種々の環境に対する適応の促進に求める、というブルーマーの科学観は、彼の論文「概念なき科学」29)に最も顕著に現れている。

人間は眼前の環境に対して適応する際に「知覚」(perceiving)を行う。この知覚という営みは、ある一定の概念に基づいて行われるが、既存の概念が適応の道具としてうまく活用され得ないとき、それを再構成する行程が介在する。ブルーマーの言う「認識」(conceiving)の過程がそれに他ならない。この過程を通じて、既存の概念は再構成され、再構成された概念は新たな知覚を導く。この「知覚」・「認識」という営みは絶えることなく続く。その意味で人間が持つ概念とは常に仮説としての性格を持ち続ける。人間が用いる概念には「常識的概念」(common-sense concept)と「科学的概念」(scientific concept)の二つがあり、後者の概念が用いられる「科学」(science)という営みにおいては、科学者は既存の概念の再構成という営みを、より洗練された形で、より積極的に行わなければならない。ブルーマーがその主著『シンボリック相互作用論』(１９６９年)の第１章「シンボリック相互作用論の方法論的な立場」で掲げる「自然的探求」(naturalistic investigation)ないしは「探査と精査」(exploration and inspection)とは、そうした“再構成”活動に与えられた別称に他ならない 30)。ブルーマーは自然的探求という営みを指して「研究の指針となる概念と経験的観察との“絶え間ない相互作用”」31)と表現しているが、この「絶え間ない相互作用」において科学者(社会学者)が概念を用いる“その用い方”としてブルーマーが提示するのが、周知の「感受概念」(sensitizing concept)法である 32)。すなわち、「〔内容規定の厳密な〕概念がもつ抽象的な枠組みの中に事例を埋め込むのではなく、〔内容規定の大まかな〕概念から出発して、事例の持つ個々の独自な態様へと至らなければならない」33)とする“用い方”を、ブルーマーは提唱している。

初期シカゴ学派が捉えたシカゴ的世界とは、西欧・北欧・東欧・南欧などからの大量の移民の流入に起因する「共通に見られるような習慣はほとんどない」世界、「コスモポリタンな住民を何らかの共通の目的に結合させるような共通の見方も存在しない」世界、「そこに住むたいていの人々が非常に多様な階級と種類からなる」世界であった 34)。眼前の現実をこうした多様性に満ちた領域と捉え、そうした領域にトーマスやパークは「社会解

体」(social disorganization)や「同化」(assimilation)といった概念で迫っていった35)。そうしたトーマスやパークの持つ現実感覚や研究姿勢に賛同するブルーマーもまた、「現実の現れ方は事例ごとにさまざまであるから、われわれが固定化された客観的な特質や表現方法にではなく、大まかな指針に頼らなくてはならないことは明らかである」36)とする考えのもと、「定義的概念」(definitive concept)の使用を退け、「感受概念」の使用を支持する結論にたどり着いたことはむしろ当然のことといえるであろう。

「行為者の観点」(standpoint of the actor)からのアプローチーー初期シカゴ学派のエートスの継承ーー

ブルーマーのシンボリック相互作用論において、社会とは、人々が状況の定義と再定義(他者の考慮、考慮の考慮)という営みによって、日々、構成・再構成しているトランスアクションが折り重なったものと捉えられている。これが先に見たブルーマーの社会観であった。こうしたパースペクティブを携え、前項に描写した自然的探求を実践しようとするならば、研究者は必然的に「行為者の観点」から社会にアプローチすることを求められる。こうブルーマーは考えている。

行為者の観点からのアプローチということで意味されているのは、研究者が研究対象となる行為者の役割を取得するという営みである。その点についてブルーマーは次のように述べている。「シンボリック相互作用論の立場から研究者に要求されるのは、人々がそれを通じて自らの行為を構成する解釈の過程〔=自己相互作用〕を把握するということである。・・・・この過程を把握するためには、研究者は、自らが研究している・・・・活動単位の役割を取得しなければならない。・・・・こうした事実を認識していたが故に、R・E・パークやW・I・トーマスといった学者の調査研究は、あれほど優れたものとなったのである」37)。

ここで上記の言明が意味する研究手法とは、具体的には“参与観察法”に他ならない。すなわち、上記の言明は、社会学者自らトランスアクションの中に分け入り、「他者の考慮」「考慮の考慮」を行え、という方法論的要請に他ならない。ブルーマーがトーマスとF・W・ズナニエツキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』から示唆を受け、その有効性を制限付きとはいえ高く評価した「ヒューマン・ドキュメント」(human documents)の活用もその要請を実行する手段の一つである38)。

眼前の社会的相互作用に研究者自ら分け入り、人々が日々、社会(トランスアクション)を作って行く、その営みを実体験せよ、というブルーマーの上記の要請は紛れもなく、初期シカゴ学派社会学のエートスである「市井に飛び込む社会学」(doing sociology)39)を忠実に継承した結果だといっても過言ではあるまい。

注

0) なお本論は、2003年7月公刊予定の次の文献に所収予定の原稿である。中野正大・宝月　誠編、『シカゴ学派の社会学』(仮題)、世界思想社。なお付言するならば、本論は、あくまで、ブルーマーのシンボリック相互作用論を(初期)シカゴ学派との関連において論じたものであり(すなわち、ブルーマーのシンボリック相互作用論のシカゴ学派的側面の抽出が主たる目的であり)、ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論化を精緻に検討しようとしたものではない。彼の理論化の精緻な検討については、文献リスト掲載の桑原の一連の論稿を参照されたい。

1) Blumer, 1977=1992, p.153; 後藤、1991年、275-276頁、参照。

2) 中野、2001年、3、5頁、参照。

3) 吉原、1994年、53頁。

4) Faris,1967=１９９０年、１６頁、１７頁.
5) Fine, 1995.
6) 桑原、２０００年。
7) 皆川、１９８９年。
8) Blumer, 1969, pp.78-89=１９９１年、１０１－１１５頁.
9) Blumer, 1977=1992, p.154
10) Blumer, 1969, pp.117-126=１９９１年、１５２－１６４頁; 船津、１９９９年、１８０，２０４頁、参照。
11) Blumer, 1969, pp.10-11=１９９１年、１３頁.
12) Blumer, 1969, pp.9-10=１９９１年、１１－１２頁; Blumer, 1993, p.163, p.179.
13) Blumer, 1969, p.8, p.70=１９９１年、１０、９０頁.
14) Blumer, 1969, p.110=１９９１年、１４２頁.
15) Blumer, 1969, p.110=１９９１年、１４２－１４３頁.
16) 桑原、２０００年、５０頁。ちなみに、この「考慮の考慮」という知見は、既にパークの次の論文においても示唆されている。Park,R.E., 1927, Human Nature and Collective Behavior, American Journal of Sociology:32, pp.733-741.なお、この「考慮の考慮」という知見は、現代社会学において、ブルーマーのみならず、その他の理論化においても重要視されている。Luhmann,N.,1984, Soziale Systeme, Suhrkamp=１９９３年、佐藤　勉監訳、『社会システム理論（上巻)』、恒星社厚生閣；１９９５年、佐藤　勉監訳、『社会システム理論（下巻)』、恒星社厚生閣; Maucorps, P.H., and Rene Bassoul, 1962, Jeux de mirroirs et sociologie de la connaissance d'autrui, Cahiers internationaux de Sociologie:32, pp.43-60; Glaser, B.G., and Strauss,A.L., 1964, Awareness Contexts and Social Interaction, American Sociological Review:29, pp.669-679; Scheff,T.J.,1967, Toward a Sociological Model of Consensus, American Socioloigical Review:32, pp.32-46; Laing, D.A., et al., 1966, Interpersonal Perception, London; Lefebvre, V.A., 1972, A Formal Method of Investigating Reflective Processes, General Systems:17, pp.181-188.
17) Blumer, 1977=1992, p.154.
18) Blumer, 1969, pp.108-110=１９９１年、１４０－１４３頁。
19) Blumer, 1969, p.62=１９９１年、７９頁.
20) Blumer, 1993, pp.184-186.
21) Blumer, 1993, p.186.
22) Blumer, 1969, p.13=１９９１年、１７頁.
23) Blumer,1969b, p.12=１９９１年、１５頁.
24) 船津、１９８６年。
25) 詳しくは、桑原、２００２年を参照されたい。
26) Hammersley,1989,p.46.
27) Hammersley,1989,p.44.
28) Blumer,1980,pp.415-416.
29) Blumer,H.G.,1931,Science Without Concepts, American Journal of Sociology:36, pp.515-533=Blumer,1969, pp.153-170=１９９１年、２００－２２３頁.
30) Blumer, 1980, p.415.
31) Blumer, 1977=1992, p.154.
32) Blumer, 1969, pp.140-152=１９９１年、１８２－１９９頁.
33) Blumer, 1969, p.149=１９９１年、１９４頁.
34) 一連の引用は当時のシカゴ市の一地区「ニア・ノース・サイド」(Near North Side)

についてのパークによる描述である（Zorbaugh, 1929=１９９７年、xiii-xiv)。周知の「物理的距離と社会的距離が一致しない状況」（Zorbaugh, 1929=１９９７年、xv)という、パークのみならず初期シカゴ学徒に普遍的なこの現実感覚は、ブルーマーのシンボリック相互作用論にも継承されている。「個人や集団は、たとえ同一の空間的な位置を占有し、そこで生活していたとしても、きわめて異なった環境を持っている可能性がある。いわば、人々は、たとえ隣り合って住んでいたとしても、異なった世界に住んでいることがあり得る」(Blumer,1969, p.11=１９９１年、１４頁)。

35） Blumer, 1969, p.150=１９９１年、１９５頁.

36） Blumer, 1969, pp.149-150=１９９１年、１９４頁.

37） Blumer, 1969, p.86=１９９１年、１１２頁.

38） Blumer, 1939; Blumer, 1969, p.119=１９９１年、１５４－１５５頁.

39） 徳川、１９９５年、１３３頁。

文献

Blumer, H.G., 1969, Symbolic Interactionism:Perspective and Method, Prentice-Hall=１９９１年、後藤将之訳、『シンボリック相互作用論－パースペクティヴと方法－』、勁草書房.

－－－－, 1977,Comment on Lewis,Sociological Quarterly:18, pp.285-289=Hamilton, P.,(ed.), 1992, George Herbert Mead critical assessments vol.2 section2: Mead and Symbolic Interactionism, Routledge, pp.151-157.

－－－－, 1980, Mead and Blumer:The convergent methodological perspectives of social behaviorism and symbolic interactionism, American Sociological Review:45, pp.409-419.

－－－－, 1993, Athens, H.L., (ed.), Blumer's Advanced Course on Social Psychology, Studies in Symbolic Interaction:14, pp.163-193.

－－－－, 1939, Critiques of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America", Social Research Council.

Faris,R.E.L.,1967,Chicago Sociology 1920-1932, University of Chicago Press=１９９０年、奥田道大、広田康生訳、『シカゴ・ソシオロジー：１９２０－１９３２』、ハーベスト社.

Fine, G.A., (ed.),1995, A Second Chicago School ?, University of Chicago Press.

船津　衛、１９８６年、「自我の社会性」、作田啓一、井上　俊編、『命題コレクション社会学』、筑摩書房、５－１１頁。

－－－－、１９９９年、『アメリカ社会学の展開』、恒星社厚生閣。

後藤将之、１９９１年、「解説：ハーバート・ブルーマーの社会心理学」、後藤将之訳、『シンボリック相互作用論』、勁草書房、２７３－３１４頁。

Hammersley, M., 1989, The Dilemma of Qualitative Method:Herbert Blumer and the Chicago Tradition, Routledge.

桑原　司、１９９６年、「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論再考－－主観主義を越えて－－」、『社会学年報』第２５号、東北社会学会、８１－１０１頁。

－－－－、１９９７年、「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考」、『文化』第６０巻第３・４号、東北大学文学会、５５－７２頁。

－－－－、１９９８年、「『考慮の考慮』と情報の駆け引き－－コミュニケーションへのシンボリック相互作用論からの再接近－－」、『社会学年報』第２７号、東北社会学会、１４９－１６６頁。

－－－－、２０００年、『社会過程の社会学－－ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考－－』、関西学院大学出版会(http://www.ipsu.bookpark.ne.jp/ipsu/)。

――――、２０００年 a、「シンボリック相互作用論序説（１）――コミュニケーションの社会学理論――」、『経済学論集』52、鹿児島大学経済学会、１６５－２１０頁。
――――、２０００年 b、「シンボリック相互作用論序説（２）――コミュニケーションの社会学理論――」、『経済学論集』53、鹿児島大学経済学会、１０３－１３７頁。
――――、　２００１年、「シンボリック相互作用論序説（３）――東北大学審査学位論文（博士）の要旨――」、『経済学論集』54、鹿児島大学経済学会、６９－８６頁。
――――、２００２年、「自我の社会性」、船津　衛、安藤清志編著、『自我・自己の社会心理学』、北樹出版、２１－２９頁。
皆川満寿美、１９８９年、「社会過程の社会学――ヒューズ」、片桐雅隆編、『意味と日常世界』、世界思想社、５７－８４頁。
中野正大編、２００１年、『シカゴ学派の総合的研究』、平成１０年度～１２年度科学研究費報告書。
徳川直人、１９９５年、「共同とコミュニケーションのフィロソフィー」、小林一穂編著、『行為と時代認識の社会学』、創風社、１２７－１６７頁。
吉原直樹、１９９４年、『都市空間の社会理論』、東京大学出版会。
Zorbaugh, H.W., 1929, The Gold Coast and the Slum, University of Chicago Press=１９９７年、吉原直樹、桑原　司、奥田憲昭、高橋早苗訳、『ゴールド・コーストとスラム』、ハーベスト社



＜正誤表＞

1)「該当箇所」
2)「誤」
3)「正」

1)「(中)表紙」
2)「Korimoto 1-21-30, Kagoshima, 890-0062」
3)「Korimoto 1-21-30, Kagoshima, 890-0065」

1)「『自己』(self)への着目」の項
2)「第2の前提『事柄の意味は、その人間が、自分が出くわした事柄に対処する際に用いる解釈の過程(interpretative process)〔＝自己相互作用〕を通じて、操作されたり修正されたりする』から」
3)「第2の前提から」

1)「注16」
2)「Maucorps, P.H., and Rene Bassoul, 1962, Jeux de mirroirs et sociologie de la connaissance d'autrui, Cahiers internationaux de Sociologie:32, pp.43-60」
3)「Maucorps, P.H., and Rene Bassoul, 1962, Jeux de mirroirs et sociologie de la connaissance d'autrui, Cahiers internationaux de Sociologie:32, pp.43-60」

1)「注16」
2)「Scheff,T.J.,1967, Toward a Sociological Model of Consensus, American Socioloigical Review:32」
3)「Scheff,T.J.,1967, Toward a Sociological Model of Consensus, American Sociological Review:32」

1)「注16」
2)「General Systems:17」
3)「General Systems:17」

1)「注18」
2)「Blumer, 1969, pp.108-110=1991年、140－143頁。」
3)「Blumer, 1969, pp.108-110=1991年、140－143頁.」

1)「注23」
2)「Blumer,1969b, p.12=1991年、15頁.」
3)「Blumer,1969, p.12=1991年、15頁.」

1)「文献」
2)「Zorbaugh, H.W., 1929, The Gold Coast and the Slum, University of Chicago Press=1997年、吉原直樹、桑原　司、奥田憲昭、高橋早苗訳、『ゴールド・コーストとスラム』、ハーベスト社.」
3)「Zorbaugh, H.W., 1929, The Gold Coast and the Slum,University of Chicago Press=1997年、吉原直樹、桑原　司、奥田憲昭、高橋早苗訳、『ゴールド・コーストとスラム』、ハーベスト社.」

桑原　司